

静脈産業の

現在地と未来



(3)

資源循環ネットワーク
彌永 冴子

私の住む香川県直島にある製錬所は、銅鉱石等バーシオン原料から資源を抽出することで、非鉄金属素材を生み出すことが生業であった。ただし今では、国内外から調達したE-Scrapから金をはじめとする希少金属を抽出することに力点が移っている。製錬所は、主要な静脈産業の一角を担っているのである。

GDPという指標への偏重を生み出した現代の資本主義的経済は、そもそも誰が始めたのだろうか。大量生産・大量消費

企業経営者が、CE実現の牽引者となる未来は想像しにくい。一方、政府や研究機関、消費者が単独で社会の経済システム変革を牽引する未来も想像しにくい。

すなわち、CE実現に向けては、「企業」「研究機関」「政府」「消費者」——つまり、産学官民一

そのどれが欠けてもわれわれの目指す循環型社会は実現しない。だからこそ、CE実現に向けたシナリオを描き、率先して行動を起こすことで社会を変革していく存在、

例えば「CEアクセラレーター」とも呼ぶべき主体への期待が高まっている。

である。当然静脈産業にとっては、リサイクルに伴う制度対応の徹底、原材料の安定確保や品質証明等を実現することは極めて難しい。それでも、こうした困難を過去から

強いられてきた業界だからこそ、トレーサビリティ確保のための仕組み作り、リサイクル財開発に向けた技術開発が現在

「CEアクセラレーター」としての静脈産業

産学官民連携実現のハンドルの握る可能性

命に端を発している。生産活動の中心が農業から工業へ移り、技術革新を求められているサーキュラーエコノミー(CE)の環境に配慮したモノ作り、「研究機関」のリサーチ材開発等の技術開発、製造・流通システムから価値観に至るまで全てが異なる。故に、リニアエコノミーを押し進めてきたメーカー等の

体となった取り組みが必須と考えられる。「企業」の環境に配慮したモノ作り、「研究機関」のリサーチ材開発等の技術開発、製造・流通システムから価値観に至るまで全てが異なる。故に、リニアエコノミーを押し進めてきたメーカー等の

昨今急速に力をつけてきた静脈産業は、その有力な候補となり得るのである。CE実現に必須とされる「動静脈連携」では、動脈側から静脈側への流れよりも、静脈側から動脈側への流れのハードルの方が高い。無論、これ

から最終製品の品質確保や納期、さらには市場

ニーズを意識した「売れる」製品作りを課されるのは動脈産業である。それでも、EU規制等を背景に一定の再生素材利用が義務化されつつある現状では、静脈側から動脈側に一定の影響力を保ちながら産学官民連携を視野に入れた社会全体での資源循環のハンドルの握ることも不可能ではな

い。将来的にCEというコンセプトが常識化するれば、既存静脈産業の役割は全ての主体にとっての常識となり得る。かつて「IT産業」という言葉が、産業全般への情報化の波及とともに死語となったのと同様に、「静脈産業」という言葉自体が意味を失う近未来に期待をしたい。



CEアクセラレーターとしての静脈産業

図 産学官民連携によるCEの実現